様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ００３７９

研究課題名（和文）華語語系文学の理論と実践に関する基礎的研究

研究課題名（英文）The thoery and practice of Sinophone Literature

研究代表者
山口　守（YAMAGUCHI, Mamoru）

日本大学・文理学部・特任教授

研究者番号：７０２１０３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：令和元年から令和３年度は研究課題の理論面を中心に、特にSinophone Literature概念における分岐について考察を行った。その中で、これまで華語語系文学理論の基礎を築いてきた王徳威と史書美の二人の理論的分岐に関してある程度明確化できたと考える。さらに各地の華語創作実践例を検証し、その問題点を剔出する作業を進めた。また研究全期間を通して、華人のChinese-nessを相対化するため、アメリカ人から見たChinese-nessについて、アイダ・プルーイットの例から検証を進めた。最終年度にその研究を書籍化できたことが本課題研究の大きな成果の一つと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究が学術的に寄与する点を挙げれば、まず日本の研究界において認知途中の華語語系文学Sinophone Literatureについて、研究のプラットフォームにあたるその理論体系に関して、問題点を剔出しながら整理を進めたことが大きな意味を持っている。その過程でChinese-nessの陥穽にフォーカスしながら、王徳威と史書美の理論的分岐を鮮明に指摘することができた。これに加えて中国、台湾、マレーシア等各地の華語創作実践のケーススタディを進めることができたことで、理論の実証よりも、理論の深化に役立つ研究を展開できたことが、本研究の意義をいっそう高めたと考えている。

研究成果の概要（英文）：From 2019 to 2021, I focused on the theoretical aspect of the research topic, and particularly on the divergence of the Sinophone Literature concept. In this process, I believe that I was able to clarify to some extent the theoretical divergence between David Wang and Shu-mei Shi, who have built the foundations of Sinophone literary theories. In addition, I examined examples of the literature in Chinese language in various places and proceeded with the task of identifying the problems. In order to relativize the Chinese-ness of the overseas Chinese throughout the research period, I examined the Chinese-ness seen by Americans from the example of Ida Pruitt. It can be said that the publishing it’s work in the final year should be one of the major achievements of this project research.

研究分野：中国語圏文学

キーワード：華語語系文学　華語創作　マイノリティ　非漢族　母語　文字と音　アイダ・プルーイット　Chinese-ness

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

複雑な歴史的経緯や現実を持つ華語で創作した文学を従来は華文文学と呼んできたが、ディアスポラ意識を前提とする限り、それは中心たる中国文学から延伸された周縁に位置づけられ、中華文化の均質性を前提とする全体性の中に組み込まれてしまう。こうした既成の華文文学概念に潜む中国中心主義を批判的に乗り越え、国家や民族の呪縛から逃れると同時に、逆に国家や民族に対する批判を内包する文学概念として華語語系文学がある。21 世紀初頭、アメリカや台湾の研究者を中心に華語語系文学（Sinophone Literature）概念が提唱、運用され、その学術的結果が次々と発表されるようになってきた。Sinophone とは Anglophone（英語話者）や Francophone（フランス語話者）を参照した造語で、原義的には華語（中国語や漢語を包括する概念）を話す者を指す。つまり華語語系文学とは、華語話者が創作する文学を指す新しい用語である。中国文学のように国民国家の枠組みをもとにした国家文学と異なり、言語の複雑系を出発点に構想された文学概念である。

華語語系文学の理論を提唱、実践する中心人物は、王徳威（David Wang、ハーバード大学教授）と史書美（Shu‐mei Shih、カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授）である。王徳威は中国国内における漢語の多様性を意識して、中国文学を研究対象から排除せずに対話の相手とする戦略を持っている。一方、マイノリティ研究やジェンダー研究から出発する史書美は、中国からの移民が現地国に定住する過程で生み出される華語の文学実践を中国文学と切り離して考える。同時に、帝国として振る舞う中国だけでなく、台湾やマレーシアなど漢族移民の在住国における権力的位置を批判する視点を持って、中国国内のチベットやウイグルやモンゴルなど非漢族の漢語実践や、華人在住国における先住民族との衝突、交流から生まれる漢語実践を重視する立場を取る。

本研究はこうした華語語系文学の理論を踏まえながら、同時に華語もまた多言語社会の一つの言語である点を重視し、アルジュン・アパデュライの文化本質主義批判（『さまよえる近代』）を参照しながら、華語を共同資産ではなく共通資源として考える立場から華語語系文学の実践例を検証する。

２．研究の目的

本研究は華文文学が内包してしまう国家主義や民族主義を乗り越えるため、新たな学術概念である華語語系文学理論の有効性や実践の検証を進める。実践例はアジア各地に広がるが、それを分析、検証するために二つの視点を用意している。まず母語問題がある。華語の在地化実践として華語語系文学は母語創作を重視するが、母語概念自体が社会や政治の文脈で可変的であることを実践例で明らかにすることで、華語語系文学理論が母語の絶対性から免れていない欠点を是正できるだろう。これには、母語の上に別の言語が加わる「足し算」のバイリンガルではなく、母語内部に複数の言語が内包されている「割り算」のバイリンガル（西成彦『バイリンガルな夢と憂鬱』）という視点が有効である。多和田葉子も母語の外へ出る言語行為を提唱する時（『エクソフォニー』）、植民地経験国では母語を含む非対称的な二重言語状態となる点を指摘している。こうした点を踏まえ、本研究は華語語系文学における母語概念の修正を行うことで、その学術理論の発展に寄与できるだろう。

次に華語語系文学が phone に注目しているように、文学における音声の問題を解明することがある。現在中国の漢語作家として活躍するアーライ（阿来）は、ギャロン語（口

頭語）及びチベット語と漢語（書記語）の三重言語状態にある。小説にギャロン語の音は表現されないが、会話部分はギャロン語を漢語に自己翻訳して書く。いわば漢語の中にギャロン語の音が意訳されている。一方、台湾のパイワン族作家リグラヴ・アウはパイワン語の聞き書きを元に文章を書くが、パイワン語の音が漢字で表記され、異質化される。こうした多言語社会のマイノリティの漢語創作における音と文字の関係は、これまで日本でほとんど比較研究されてこなかった。本研究は華語語系文学理論を通じて、特に phone の視点から華語創作実践の比較研究を進め、文学言語における文字と音の関係を考察するのも目的である。

３．研究の方法

華語語系文学の理論体系を把握しながら、中国、台湾、マレーシア各地の華語創作実践例を検証する。理論面では王徳威や史書美を中心に、Chinese-ness への視点にフォーカスしながら、理論体系や理論的陥穽を検証する。参照例として Far Hing Chong（マレーシア・プトラ大学）の華語語系文学理論も扱う。資料面ではアジア各地の華語文学創作実践を、雑誌や全集などを基礎資料として収集し、さらに個別作家研究へと進む。具体的には、中国の非漢族（青海・四川のチベット族）作家のアーライやペマ・ツェテン、台湾の原住民族（パイワン族とタイヤル族）作家のリグラヴ・アウ、及びマレーシア出身の華人作家の黄錦樹の華語作品に着目しながら研究を進める。

一方、研究全期間を通して、王徳威と史書美らが想定する華人の Chinese-ness を相対化するため、アメリカ人から見た Chinese-ness について、アイダ・プルーイットの例から検証を進める。アイダ・プルーイットの両親が宣教師として清末に経験したチャイニーズ・インパクトが、中国側のウェスタン・インパクトとどのような相互関連を持つのか、時系列的に研究を進める。

４．研究成果

華語語系文学は国家・民族・体制・言語・歴史における規制の枠組みを超える文学概念を新たに構築し、華語文学実践を政治的な規制から解き放って、各地に居住する個々の作家の主体的な営為にフォーカスするために登場した。そのため、本研究においては、山口守「巴金在台湾」（『現代中国文化與文学（33）』、中国四川：巴蜀書社、2020 年 10 月、1－19 頁）のように、中華民国と中華人民共和国という国家体制、或いは中国と台湾という政治体制の垣根を越えた作家の越境行為を検証する研究成果が特徴的である。また同じく山口守「巴金與西班牙内戦」（王晴編『日本漢学中的上海文学研究』、上海遠東出版社、2021 年 10 月、201-215 頁）のように、中国とスペインという国際空間における作家の思想を検証した研究成果も越境性を強く意識したものと言える。両研究成果とも中国（四川と上海）における刊行発表であることから分かるように、言論規制を潜り抜けて中国学術界で評価されたことの証明になるであろう。また「巴金在台湾」の内容は台湾学術界でも注目されて、2023 年 3 月に台湾における文学研究の中心たる台湾大学台湾文学研究所において学術発表を行った。

一方、華語語系文学を考察する際に重要なキーワードとなる Chinese-ness に関しては、華人の側からの視点と対照するために、清末民初のアメリカ人宣教師の来華宣教活動の歴史を検証し、Western Impact と Chinese Impact の両極設定の陥穽をつきながら、アイダ・プルーイットの生涯を追う中で、Chinese-ness を単に東西文化の狭間で考えるだけでなく、伝統と近代の問題として捉え返そうと試みた。その研究成果が『中国語中国文化』（日本大学大学院文学研究科中国学専攻）に連載後に整理加筆して刊行した山

口守『中国の民衆と生きたアメリカ人：アイダ・プルーイットの生涯』（岩波書店、2023年、全344頁）に結実している。連載当時から中国国内で注目され、同書は現在中国語訳作業が進行中で、検閲問題をクリアできれば来年度に刊行される予定である。

なおチベット作家ペマ・ツェテンに関する論文を準備していたところ、2023年5月に当該作家の訃報が届き、できるだけ早く論文発表に向けて研究を進めたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山口守	４．巻 第19号
２．論文標題 アイダ・プルーイットの生涯ー二つの国と二つの文化ー（４）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 中国語中国文化	６．最初と最後の頁 54-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口守	４．巻 1
２．論文標題 巴金與西班牙内戰	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本漢学中的上海文学研究	６．最初と最後の頁 201-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口守	４．巻 33
２．論文標題 巴金在台湾	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代中国文化與文学	６．最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口守	４．巻 18
２．論文標題 アイダ・プルーイットの生涯ー二つの祖国と二つの文化ー（３）	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中国語中国文化	６．最初と最後の頁 65－95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山口守	４．巻 17
２．論文標題 アイダ・プルーイットの生涯ー二つの国と二つの文化ー（２）	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国語中国文化	６．最初と最後の頁 43-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　11件／うち国際学会　11件）

１．発表者名 山口守
２．発表標題 巴金在台灣以及再談台灣作家
３．学会等名 台湾大学台湾文学研究所（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 北京時期的張我軍:被文化與政治夾擊的主體性
３．学会等名 清華大学台湾文学研究所（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 從啓蒙到發展:日本社會對台灣文學的認知和迷戀
３．学会等名 政治大学台湾文学研究所（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 台灣文學史應當立體化而看
３．学会等名 思相枝:台灣文學史編緝與纂寫國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 老舍『四世同堂』英文本以及浦愛德Ida Pruitt的中国理解
３．学会等名 四川大学文学新聞学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 巴金対日本社会主義者的批判與呼吁
３．学会等名 四川大学文学新聞学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 巴別塔以後：華語語系文学是否能聴辨個別声音
３．学会等名 高麗大学文学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 北京時期的台湾作家張我軍:被文化与政治挟撃的主体性
３．学会等名 四川大学文学新聞学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 从《平等》雑誌看无政府主義思想空間的越境性:以巴金与劉忠士Ray Jones的往来書信為中心
３．学会等名 四川大学文学新聞学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 巴金与薩珂、樊塞蒂事件及小説《滅亡》
３．学会等名 四川大学文学新聞学院（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口守
２．発表標題 巴金在台湾
３．学会等名 第13回巴金国際学術討論会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

1．著者名 山口守	4．発行年 2023年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 344
3．書名 中国の民衆と生きたアメリカ人：アイダ・プルーイットの生涯	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関